

貨幣と資本

——商品・貨幣・資本(7)—— (その2)

飯田 繁

4 貨幣と資本

a 貨幣の資本への転化

——剰余価値の源泉と生産——

(1) 流通過程では価値は増殖しない

(2) 労働力の商品化

——労働力の所有者と労働の所有者——

(3) 労働力の価値

……以上(7)(その1)第15巻第1号(昭和56年3月)

(4) 労働力の使用価値

b 資本運動のもとでの貨幣運動

(1) 資本の諸形態と諸運動

(2) 資本の現実的流通過程

5 おわりに

……以上本稿(7)(その2)

4 貨幣と資本

a 貨幣の資本への転化

——剰余価値の源泉と生産—— (つづき)

(4) 労働力の使用価値

労働力商品の最大の特徴はその使用価値にある。普通商品の使用価値は、有形・無形の自然的・物質的諸要因によって構成されており、消費すれば短期・

長期的にいずれは消える。ところが、労働力商品の使用価値は、使えば人間労働となって新しい諸使用価値とそれらに宿る新しい価値をつくりだす。しかも、労働力商品の価値 (v) をこえる新価値 ($v+m$) を。普通商品では、使用価値と価値とはもともと互いに異質のものとして量的に比較されえないものなのに、労働力商品では両者は結果的には同質のもの・価値として比較計量されるばかりか、その量的差異 (m , 剰余価値) の取得こそが労働力を商品として大量に買いとる貨幣所有者 (→資本家) の狙いである。普通商品の交換では、所有者たちは等質等量の価値をあたえあい、異質異量の使用価値をうけとり合うことによって、たがいに価値のうえではなく使用価値そのままのうえで利益をうけ合う。貨幣を媒介とする・しないにかかわらず。それで万事おわるのが、普通商品交換のケースである。労働力商品のばあいも、たしかに交換・流通過程だけを見ると、事柄はまったくおなじだ。労働力商品の売り手・労働者は売った商品の価値 (労働力の再生産費) を価値どおりに貨幣形態・賃金でうけとり、自分ひとりでは使いようもない使用価値を買い手・資本家にわたす。そして売り手は、売って得た商品の価値 (価格・賃金) で生活・文化・教育用品などを買いとり ($W_1 - G - W_2$)、それらの商品 (W_2) の使用価値を自分のものとして消費してじぶんの労働力商品 (W_1) を再生産する。労働力商品の売り手も、だから商品交換によって、使えない使用価値を手ばなして有用な使用価値を手にしたわけで、ここにみられることは、普通商品の単純商品流通方式とおなじく使用価値の質的交換である。他方、買い手からみると、労働力商品の価値を貨幣形態 (その貨幣形態はもとをただせば、なんらかの商品の転化形態) で支払って、労働力商品の使用価値をうけとる。生産過程にはいるまでの商品交換・流通過程段階では、単純な商品流通方式とおなじく互いにそれぞれに好みの使用価値を手にするだけのことだ。もしもそれぞれの使用価値が、労働者にとっては生命の維持に役立たず、また資本家にとって価値の増殖に役立たないとすれば、単純商品流通方式による使用価値の相互とりかえは資本主義への展開 (貨幣の資本への転化) の契機とはならなかったろう。ここでくりかえし強調されなけれ

ばならないのは、労働力の使用価値が生産過程では価値増殖の根源となる類例のない特殊性をつかむことである。

ところで、生産過程で労働するのは、労働力商品の売り手(売ったあと所有者)であって、資本家ではない。資本家は労働力の価値を支払ってその使用価値を受けとった。労働力の使用価値・労働をわがものとして自由に駆使できるのは資本家であって、労働者ではない。労働者がじぶんの労働力を商品として日々売りわたしたということは、労働者が生産過程で日々の労働を義務づけられているということだ。“労働力の所有者”が労働するのであって、“労働の所有者”が労働するのではない。もしも、労働力の所有者・売り手・労働者が労働力の買い手・資本家のもとで労働しないならば、労働者は商品交換の一般原則に背反することになる。商品の売り手が商品の価値を受けとっていながら、その商品の使用価値を買い手にわたさないことになるのだから。労働者は賃金を受けとったいじょう(遅かれ早かれ、いやでもおうでも労働するために買い手の作業場へ出かけなければならない⁽¹⁾)。たとえ、労働の成果・結実が労働した人のものにはならなくても、おなじ労働力の所有者でも労働力を商品として売らなかった、したがって労働の所有者でもあった、単純商品流通方式のもとでのかつての独立生産者はじぶんの労働の成果・結実をすべてわがものにしたのだったが、こうして、資本主義社会ではかつては見られなかったいわゆる“労働の疎外”現象があらわれることになる。労働力の使用価値、いいかえれば労働力の使用・支出・消費=労働が価値増殖・剰余価値の源泉であるというだけではなく、労働によって生産される剰余価値が労働しない人・“労働の所有者”のものとなるという新型の(奴隷時代のとはちがう)“労働の疎外”現象が、単純商品社会を資本主義社会(利害対立的な社会関係)へ転化する主要な動因となったのだった。

- (1) 「以前には貨幣所有者だったが、いまは資本家として先頭をきってすすむ。労働力所有者はかれの労働者としてかれについてゆく。一方は、意味深げにホクソ笑みながら仕事熱心に、他方は、さも自分のヒフを市場(作業場?—飯田)にもって行けばナ

メシ皮にされるしかなかりうと思案に暮れたご仁のようにオズオズ・しぶしぶと」
(Das Kapital, Bd. I, S. 184. [傍点—原著者])。

労働力商品の消費過程は普通商品の生産過程である。労働力商品の使用価値、労働力の支出・使用・消費、すなわち労働は、商品交換の原則にもとづき、労働力商品の売り手・労働者にとっては“する当然の義務”として、買い手・資本家にとっては“させる当然の権利”として、“労働力の所有者”の意思にしたがってではなく、“労働の所有者”の意思にしたがって目ざすある特定の普通商品の生産過程でおこなわれる。普通商品の生産過程についてマルクスは、“労働の2重性”にふれながらも、『資本論』のさいしょに説かれている単純な商品の段階では結論的な表現をしめすだけでくわしくのべていない。普通商品の使用価値生産過程(労働過程)と価値生産過程(価値形成・増殖過程)が入念に説かれるのは、資本主義社会に特有な剰余価値の生産過程が究明される第3篇以降の諸章でだ。

ところで、労働力商品の使用価値である労働にせよ、商品ではない労働力(単純商品社会をふくむ以前の社会の労働力)の使用・消費である労働にせよ、人間の諸欲望・もろもろの使用価値を生産するために欠かせないそれぞれ質的にちがう具体的で有用な労働としてはいりこんでゆく労働過程は、社会形態のちがいはまったくかわりのない人類生活上の共通的な自然条件⁽²⁾である。もちろん、生産上に用いられる労働手段・労働対象などの生産手段⁽³⁾の技術的・文明的水準⁽⁴⁾のあいだには、社会関係の発展におうじて大きな開きが見られるのだが。ここで注意しなければならないのは、労働過程の生産物である使用価値がなんであろうと、使用価値の所有を決定するのは労働の所有であるということだ。単純商品社会では労働力はその所有者によって商品として売られなかった。労働力の所有者は生産手段の所有者でもあったからだ。じぶんの労働力を商品として売らないということは、労働力の使用・消費(労働)は労働力の所有者じしんのものとして自由に処理され、労働の生産物である使用価値(私有社会では使用価値と価値との統一物としての商品)を所有することを意味する。独立

生産者がじぶんの労働の生産物をわがものにするのは、自ら労働するからではなく、むしろその労働が自分のものだ(労働の所有を他人にわたさない)からである。労働力が商品として売られることによって決定づけられた“貨幣の資本への転化”社会で、労働生産物の所有関係が逆転してあらわれることになった(とはいっても、労働の所有が労働生産物の所有を決定することでは一貫しているのだが、それまでの労働の所有者が非所有者に逆転した)のは、あとでみる剰余価値の所有に先行して説かれる労働過程の生産物・使用価値の所有についてもだ。

- (2) 「……労働過程は、使用価値の造出のための合目的な活動であり、人間の諸欲望をみたすための自然物の取得であるし、また人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件、人間生活の永遠の自然条件であり、したがって人間生活のどんな形態からも独立した、むしろ人間生活のあらゆる社会形態にいちように共通するものである」(Das Kapital, Bd. I, S. 192. [傍点—原著者])。
- (3) 「全過程(全労働過程—飯田注)をその結果である生産物の観点からみると、労働手段と労働対象の2つは生産手段として、労働じたいは生産的労働としてあらわれる」(a. a. O., Bd. I, S. 189. [傍点—原著者])。
- (4) 「……フランクリンは人間を“道具をつくるひとつの動物”(“a toolmaking animal” [ein Werkzeug fabrizierendes Tier])と定義づけている。遺骨の構造が、絶滅した動物種類の体質を認識するさいにもつと同じ重要性を、労働手段の遺物は過去の経済的社会構成の再判断にさいしてもつ。なにかつくられるかではなく、どのようにして、どんな労働手段をもってつくられるか、が経済上の諸エポックを区別する。労働手段は人間労働力の発展度をはかる機器であるだけではなく、労働がおこなわれる社会的諸関係をしめす標識でもある」(a. a. O., Bd. I, S. 188. [傍点—原著者])。
- (5) 「……生産物は資本家の所有物であって、直接の生産者、労働者の所有物ではない。資本家は、たとえば労働力の日価値を支払う。労働力の使用は、他のあらゆる商品の使用、たとえばかれが1日間賃借りした1頭の馬の使用とおなじく、したがって1日間についてはかれに属する。商品の買い手に商品の使用は属する、……かれ(労働者—飯田注)が資本家の作業場にはいった瞬間から、かれの労働力の使用価値は、すなわち労働力の使用、労働は資本家のものだ。……資本家の立場からみると、労働過程はかれによって買われた商品・労働力の消費にすぎないが、かれ(資本家—飯田注)はそれに生産手段をつけ加えることによってしか労働力を消費できない。労働過程は、資本家が買った物と物とのあいだの、かれのものである物と物とのあいだの一過

程である。だから、この過程の生産物はかれのワイン蔵のなかでの発酵過程の生産物とまったくおなじくかれのものだ」(a. a. O., Bd. I., S. 193-4. [傍点—原著者])。

労働生産物が商品形態をとる私有社会では、使用価値の生産はそのまま同時に価値の生産でもある。だから、うえにみた使用価値を生産する労働過程は、同時にまた価値形成過程であり、資本主義社会ではさらに同時にまた価値増殖⁽⁶⁾過程でもある。自然的な諸要因を内包する質的にちがう諸使用価値の生産が問題とされる段階では、諸生産手段の資質・発展程度やそれらに結合される労働の具体的な有用性のちがいなどが検討されなければならなかったが、これから視角をかえて価値の形成・増殖を問題とする段階では、抽象的・一般的(等質的)な人間労働の社会的必要量(社会的に必要な労働時間)をめぐって究明しなければならぬ。ここで問題の焦点となるのは、価値増殖過程の内容である。

(6) 「商品じたいが使用価値と価値との統一であるとおなじく、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない」(a. a. O., Bd. I., S. 195. [傍点—原著者])。「ところで、価値形成過程と価値増殖過程とを比べると、価値増殖過程はある一定点をこえて延長された価値形成過程にほかならない。もしこの過程が、資本によって支払われた労働力の価値が新しい等価物でおきかえられる点までしか継続しないのならば、それは単なる価値形成過程だ。もし価値形成過程がこの点をこえて継続するのならば、それは価値増殖過程となる」(a. a. O., Bd. I., S. 203-4. [傍点—原著者])。「労働過程と価値形成過程(Wertbildungsprozess)との統一としては、生産過程は諸商品の生産過程である。労働過程と価値増殖過程(Verwertungsprozess)との統一としてはそれは資本主義的生産過程であり、商品生産の資本主義的形態である」(a. a. O., Bd. I., S. 206. [傍点—原著者])。

価値を形成・増殖する抽象的人間労働は、さきにくりかえしみてきたように、もろもろの個別的な使用価値を造出する具体的有用労働・“質的に区別される特殊の労働”とはちがい、「与えられた社会的生産諸条件のもとで必要な労働時間だけが使われたと前提される⁽⁷⁾」のだから、“量的にしか区別されない一般の労働”(単純な労働、社会的な平均労働⁽⁸⁾)時間だけが問題となる。価値を形成・増殖する労働は、このように使用価値を造出する労働とはちがうのだが、“2つのちがう労働”がべつべつにおこなわれるわけではない。「労働者は同

一時間に2重に労働するのではない⁽⁹⁾、「労働者は同一の時間に一度しか労働しない⁽¹⁰⁾」。使用価値をつくる労働は同時にまた価値を形成・増殖する労働でもある。というよりも、労働は使用価値をつくらなければ、同時にまた価値をつくることも増やすこともできない。いま、かんたん化のために、ある使用価値をつくることによって価値を形成・増殖するさいの、生産過程に当然はいりこむ諸生産手段の価値については後回しにして、新たに投入される労働時間だけについてまずみることにしよう。新たに投入される労働時間が社会的に必要な平均労働時間であるかぎり、その労働量・時間によって新たに形成・増殖される価値量がきまる。もしその価値(新価値)量が資本家によって前貸しされた労働力価値部分を回収できるだけのものだったら、剰余価値は生じない。ここでもっとも重要な点は、新たに投入される労働量・時間が労働力価値の回収部分にとどまらないで、なぜそれをこえるのか、ということである。労働者が1労働日中に行使できる労働量・時間は、労働力の価値を形成する労働量・時間によって線引きされるものではない。1労働日の体力回復のために消費される生活・文化用品(家族分とも)の生産に必要な労働時間・「必要労働時間⁽¹¹⁾」によって、1労働日に支出される労働量・時間がきまるのではない。労働者たちは自分らの消費する生活資料などがどれだけの労働時間で生産されたかを知るよしもなく、それとはまったく無関係に⁽¹²⁾、資本家によってきめられた労働時間の勤めを義務としてはたす。だからこそ、労働力価値を決定する生活資料などの生産性増進→価値低下によって労働力価値(賃金)を切り下げ、相対的に剰余価値を増やそうとする資本家たちの試みも可能となるわけだ(絶対的剰余価値の生産との関係で後述)。それはさて、1労働日のあいだに労働力価値・賃金・必要労働時間のリミットを告げる“非常ベル”が鳴りひびくのではないし、“赤信号”が点滅するのでもない。またそれとともに、労働者の体力がその時点でガタ落ちに消滅してしまうのでもない。げんじつに投入するいまの労働時間が過去の労働時間(労働力の価値・賃金)・“必要労働時間”をこえて“剰余労働時間”に突入しても、当の労働者じしんはそのことになにも気づかないことだ

う。そこでまた、労働者の知らぬ間に労働力の使用価値＝労働から生まれる新価値 ($v+m$) が労働力の価値 (v) をこえ、資本家の狙い・剰余価値 (m) が労働しない人・資本家の——労働する人・労働者の、ではなく——ふところに飛びこんでくることになる。そしてまた、労働者が労働（労働力の使用価値）を提供してうけとる賃金は“労働力の価値”としてではなく、“全労働日にわたる労働報酬”として支払われる“労働の価値”（「労働は価値をつくるが、価値をもたない」のに！）であるかのように錯覚され・真相がおおいかくされることにもなる。

(7) Das Kapital, Bd. I., S. 196-7. (傍点—原著者)。

(8) 「ここではもはや労働の質・属性そして内容ではなく、労働の量だけが問題となる。これはかんたんに算出される。われわれは、……を単純な労働、社会的な平均労働と仮定する」(a. a. O., Bd. I., S. 197. [傍点—原著者])。

(9) (10) a. a. O., Bd. I., S. 208. (傍点—原著者)。

(11) マルクスは『資本論』第1巻第3篇第7章の注29でつぎのように記している。「われわれは本書で“必要労働時間”ということばを、これまでは1商品の生産のためいっばんに社会的に必要な労働時間のことに使ってきた。われわれはこれからは、労働力という特殊な商品の生産のために必要な労働時間のことにもこのことばを使う。おなじ術語をちがう意味で使うことは、まぎらわしいものではあるが、どんな科学でも完全には避けられない」(a. a. O., Bd. I., S. 225. [傍点—原著者])。ほかにも例がある。「貨幣としての貨幣」、あとで出てくる「貨幣資本」（「資本としての貨幣」）も。

(12) 「……労働力のなかにはいつている過去の労働と労働力がはたせる生きた労働とは、すなわち労働力の日々の維持費と労働力の日々の支出とは、2つのまったく違う大きさである。一方は労働力の交換価値をきめ、他方は労働力の使用価値をなす。労働者を24時間生かすためには半労働日が必要だということは、労働者がまる1日労働することをけって妨げるものではない。だから、労働力の価値と労働過程での労働力の価値増殖とは、2つのちがう大きさである。……労働力の使用が1日間につくりだす価値は労働力じたいの日価値の2倍の大きさだという事実は、買い手にとってひとつの特別な饒幸でこそあれ、けって売り手にたいする不正なことではない」(a. a. O., Bd. I., S. 202. [傍点—原著者])。

(13) 「……資本家的生産関係においては、労働力は〈商品〉として資本家にたいして価値どおりに売られ、また労働力の価値は〈労働の価値〉・賃銀の外観をとって資本家によって全労働時間にたいして支払われるかのように見え、したがって支払労働（必要労働）を超過する不払労働（剰余労働）は存在しないかのように見える……。外観

的には、剰余労働が抹消され、またはげんじつに存在する剰余労働(時間)がそのまま透明に剰余労働(時間)としてあらわれないで剰余価値に形態化されるのは、必要労働が、必要労働として表現されないで全労働日にたいして支払われるかのような外観をとるところの〈労働の価値〉・賃銀に形態化されるからにほかならない」(飯田繁『新訂 利子つき資本の理論』146ページ〔傍点—原文のまま〕)。

資本家は、こうして労働力商品の所有者・労働者から労働力商品を価値どおりに買って——価値以下に買う、のではなく——、労働力の使用価値→労働をじぶんのものにした以上は、とうぜんの権利として労働を存分に吸収・駆使して(したがって労働者側からみれば、「労働力の過剰支出」⁽¹⁴⁾)、剰余価値をできるだけたくさん搾り取ろうと必死だ。⁽¹⁵⁾単純労働化による低位価値・安価労働力の買入れ志向だけでなく、労働時間の延長による“絶対的剰余価値の生産”⁽¹⁶⁾や、労働時間を延長しないで生活資料など労働力再生産用品の質量を保ちながらの価値低下(労働力の価値・価格=賃金低下)・一般的な、さらに個別的・例外的な必要労働時間=支払い労働時間の短縮をねらいとする労働生産力・生産性向上による剰余労働時間=不払い労働時間の延長・“相対的剰余価値の生産”⁽¹⁷⁾に血道を上げる。これらについて、いくつかの引用文によるほかにはいま深入りすることはできない。つづいて一足とびに「資本の諸形態と諸運動」にはいるお膳立てとして、後回しにしていた“労働過程でおこる諸生産手段の価値移転・保存”についてすこしみておこう。上述の価値形成・増殖(v+m)過程を価値移転・保存(c)過程とのちがいで浮き彫りさせるためにも、また価値生産物(Wertprodukt, v+m)と生産物価値(Produktenwert, c+v+m)とのちがいを明らかにするためにも、そしてまた剰余価値率 $\left(\frac{m}{v}\right)$ から利潤率 $\left(\frac{m}{c+v}\right)$ への展開を知るためにも。

(14) Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 241.

(15) 「資本家は労働力をその日価値で買った。1労働日中の労働力の使用価値はかれのものだ。かれはこうして1日中じぶんのために労働者に労働させる権利をえた。が、1労働日とは何か。ともかくも、自然的な1生活日より短い、どれだけ? 労働日のこの極限(ultima Thule)・必然的限界については、資本家はかれなりの見解をも

っている。資本家としては、かれは人格化された資本でしかない。かれの魂は資本の魂 (Kapitalseele) である。しかし、資本は唯一の生命衝動をもつだけだ、つまり、価値増殖しよう・剰余価値をつくりだそうとする衝動を、かれの不変部分・諸生産手段をつかって出来るかぎり最大量の剰余労働を吸収しようとする衝動を。資本は、生きた労働の吸収によってだけ、吸血鬼然と生きかえり、それを吸えば吸うほどますます活気づく死んだ労働である。労働者が労働する時間は、資本家が買った労働力を消費する時間である。もしも、労働者が任意処理の時間を自分じしんのために消費しようものなら、かれは資本家のものを盗むことになる」(Das Kapital, Bd. I., S. 240-1. [傍点—原著者])。

- 16) (17) 「労働日の延長によって生産される剰余価値をわたくしは絶対的剰余価値と名づける。これとはちがひ、必要労働時間の短縮と、それに対応する労働日の兩構成部分の量的比率での変化から生じる剰余価値を——相対的剰余価値と名づける」(a. a. O., Bd. I., S. 330. [傍点—原著者])。「……労働日の長さが一定なら、剰余労働の延長は必要労働時間の短縮から生まれねばならないのであって、逆に必要労働時間の短縮が剰余労働の延長から発生するのではない」(a. a. O., Bd. I., S. 329.)。「労働力の価値を低下させるためには、つぎの諸産業部門で生産力の上昇がおこらねばならない。その諸生産物が労働力の価値をきめ、したがってその諸生産物が慣習的な諸生活手段の範囲にぞくするか、またはそれらを代用できるような諸生産物をつくる諸産業部門。しかし1商品の価値は、この商品に最終形態をあたえる労働の量によってだけではなく、この商品の諸生産手段のなかに含まれる労働量によっても同じように決定される」(a. a. O., Bd. I., S. 330. [傍点—原著者])。「……必要労働の剰余労働への転化による剰余価値の生産のためには、……労働過程の継続時間を延長するだけでは決して十分ではない。労働の生産力を高め、労働の生産力の上昇によって労働力の価値を低下させ、そしてこうしてこの価値の再生産に必要な労働日部分を短縮するためには、労働過程の技術的・社会的諸条件を、したがって生産様式じたいを改革しなければならない」(a. a. O., Bd. I., S. 330. [傍点—原著者])。

「例外的な生産力をもつ労働は強められた労働 (potenzierte Arbeit) として作用する、いいかえれば、同じ時間内におなじ種類の社会的平均労働よりも高い価値をつくりだす。しかし、われわれの資本家は労働力の日価値として前どおりの5シリングしか支払わない。……改良された生産様式を利用する資本家は、同業の他の資本家たちよりも多い労働日部分を剰余労働のために取りこむ。相対的剰余価値の生産で資本が全体的にすることを、かれは個別的にやる。だが、他面、新しい生産様式が一般化して、それとともに安く生産された諸商品の個別的価値と諸商品の社会的価値との格差が消えるとすぐさま、かの超過剰余価値 (Extramehrwert) は消える。……労働

生産力の上昇が諸生産部面をとらえ、それで諸生活必需品の範囲にはいり・労働力価値の諸要因をなす諸商品を安くするばあいにだけ、一般的剰余価値率が全過程を経由してあらわれる」(a. a. O., Bd. I., S. 333-4. [傍点—原著者])。

「諸商品の価値は労働の生産力に反比例する。労働力の価値もそうだ、というのは、それも諸商品価値できまるのだから。これに反して、相対的剰余価値は労働の生産力に正比例する。それは、生産力が上がれば上がり、下がれば下がる」(a. a. O., Bd. I., S. 334. [傍点—原著者])。「商品の絶対的価値は、それを生産する資本家にとっては、それじたいどうでもよいことだ。商品にふくまれており、売って実現される剰余価値だけが資本家の関心事だ。剰余価値の実現は、前貸しされた価値の回収をそれじたいふくんでいる。諸商品の価値は労働生産力の発展とは反比例して下がるのに、相対的剰余価値はこれと正比例して増えるので、したがっておなじ1つの過程が諸商品を安くし、そしてそれらに含まれる剰余価値を高めるので、交換価値の生産だけを問題とする資本家が諸商品の交換価値をたえず引き下げようと努力するというナゾ・1つの矛盾……は解ける」(a. a. O., Bd. I., S. 335. [傍点—原著者])。

価値増殖の増大を最高の狙いとする資本家はたんに労働力商品とその所有者・労働者から価値どおりに買いとるだけでは、わがものとするその使用価値(→労働)の使いようもないのだから、かんじんの狙いを達成できるはずがない。商品は使用価値と価値との矛盾の統一物であるいじょう、ある種類の使用価値をつくらなければ、いっばんに価値を増殖することはできない。そこで、資本家は、買ってわがものとした労働を具体的にある種類の使用価値の生産に使わなければならないが、そのためには労働と結合させる諸生産手段を予め自分の作業場に整備しておかなければならない。それらの諸生産手段は、生産される商品の種類によってそれぞれちがいがい、また社会の科学的・技術的發展程度におうじておのおの異なり、それらと結合される労働も、まちまちの使用価値種類にしたがって質的にちがう具体的な有用労働として、べつべつの労働過程のなかで行使される。それらの諸労働過程のなかで行使される労働によって諸生産手段(諸労働手段と諸労働対象)は長期的・短期的、耐久的・瞬過的に消費され、それにともなって部分的・全面的に諸生産手段から諸生産物への物質的

(18)

転化・価値的移転・保存がおこる。諸生産手段の価値(過去労働の結晶)である

“死んだ労働”は“生きた労働”（いま投入される労働）とはちがひ、価値を新しくつくりだせない・付加できない、ましてや増殖できない宿命をになっている。それにたいして、“生きた労働”は諸生産手段の諸生産物への物質的・価値的転移に役立つ、というよりも、不可欠の一要因として機能する。また、たとえ諸生産手段の使用価値が消費される労働過程などで廃物化・塵埃化して消え、新生産物の物質的素材を形成しなかりとも、それらに含まれていた価値は新生産物のなかに移転・保存される。⁽¹⁹⁾そこで、総括的にいえることは、諸生産手段の物質・使用価値は消費され、おそかれ早かれ失われても、それらの物質・使用価値をうけとる新生産物のなかにとどまるということである。資本家が諸生産手段に前貸しした資本はいずれ全額回収できるのであって、金額的に増えもしなければ、減りもしない（いまは、かんたん化のために、諸生産手段の価値革命・価格変動などによる期間中の資本家の利害関係について見ないとすれば）。だから、資本家が諸生産手段にどれほど巨額の貨幣（貨幣資本 c ）を前貸し・投入し、技術的生産力効果をねらおうとも、諸生産手段の価値にかんするかぎりでは、けっきょくなんの増殖も期待できない。新総生産物の価値のなかに諸生産手段の価値（ c ）が再現するだけだ。⁽²¹⁾そこで、それと端的に対比されるところの、価値を新たに形成して労働力の価値部分（ v ）をとりかえずだけではなく、その価値以上の価値増殖（ m ）をもなしとげる労働力の使用価値（“生きた労働”）の特殊性が明示されることにもなる。マルクスは、うへの諸生産手段に投入される資本部分を不変資本⁽²²⁾（konstantes Kapital, 略 c ）と名づけ、労働力価値に支払われる資本部分を可変資本⁽²³⁾（variables Kapital, 略 v ）と呼んでいる。マルクスがそう呼び・名づけたのは、一方、諸生産手段の価値（“死んだ労働”）は不変なものとして新生産物に移転・保存されるだけなのをたいして、他方、労働力の買入れに投入される資本部分は、支払われた労働力価値（賃金部分）をやがて回収するだけではなく、さらに増殖する可変の“生きた労働”を資本家のものとする、という両資本間の価値関係での決定的な違いをひと文字で示そうとしたものだろう。

- 18) 19) 「労働者は、かれの労働の一定内容・目的や技術的性格にかかわらず、一定労働量の追加によって労働対象に新しい価値をつけ加える。他方、われわれは消費された諸生産手段の価値を、ふたたび生産物価値の組成部分として、たとえば綿花と紡錘の価値を縫い糸価値のなかに見出す。諸生産手段の価値は生産物へのその移転によって保存される。この移転は、諸生産手段が生産物に転化するあいだにすなわち労働過程でおこなわれる。これは労働によって媒介される」(Das Kapital, Bd. I, S. 207-8. [榜点—原著者])。「……労働者は新しい価値のたんなる追加によって元の価値(諸生産手段の価値—飯田注)を保存する。……おなじ時点でかれの労働(2重性をもつ労働—飯田注)は1つの属性では価値をつくらねばならないし、他の1属性では価値を保存または移転しなければならぬ」(a. a. O., Bd. I, S. 208. [榜点—原著者])。「労働の単なる量的追加(生きた労働—飯田注)によって新しい価値がつけ加えられ、追加された労働の質によって諸生産手段の元の価値が生産物に保存される。労働の2重性にしたがう同一労働のこの2重作用はいろいろな現象ではっきりと示される」(a. a. O., Bd. I, S. 209. [榜点—原著者])。「……おなじ不可分な過程のなかで価値を保存する労働の属性が、価値をつくる労働の属性とどんなに本質的にちがうものかを、これは示している」(a. a. O., Bd. I, S. 209-10. [榜点—原著者])。「労働過程で価値が生産手段から生産物に移転するのは、生産手段がその独立の使用価値といっしょにその交換価値も無くするかぎりでのことだ。生産手段は、それが生産手段として無くする価値だけを生産物にわたす」(a. a. O., Bd. I, S. 211. [榜点—原著者])。「労働者はもとの価値を保存することなしには、新しい労働をつけ加えることはできない、したがってまた新しい価値をつくりだすことはできない。……こうして価値をつけ加えながら価値を保存するということは、活動しつつある労働力の、すなわち生きた労働の、1つの自然本性(Naturgabe)であり、労働者にはなんの費用もかからないが、資本家には既存の資本価値の保存という大きな利得をもたらす自然本性である」(a. a. O., Bd. I, S. 215. [榜点—原著者])。「労働がその目的に合う形態によって諸生産手段の価値を生産物に移転して保存するあいだに労働運動の各瞬間に追加的な価値(剰余価値・mだけのことでなく、v+m全体—飯田注)、すなわち新価値をつくる」(a. a. O., Bd. I, S. 216. [榜点—原著者])。

20) Vgl. a. a. O., Bd. I, S. 213-4.

21) 「……諸生産手段の価値は、生産物の価値に再現するのだが、しかし正確に言えば、再生産されるのではない。生産されるのは新しい使用価値であって、もとの交換価値はそのなかに再現する」(a. a. O., Bd. I, S. 216. [榜点—原著者])。

22) 23) 「……生産手段、すなわち原料、助成材、そして労働手段に転化する資本の部分、生産過程でその価値量を変えない。だから、わたくしはこれを不変資本部分、あ

るいはもっと簡単に不変資本と名づける」(a. a. O., Bd. I., S. 218. [傍点—原著者])。[それとはちがひ、労働力に転化される資本部分は、生産過程でその価値を変える。その資本部分は、それじしんの等価と、それをこえる1つの超過分とを、すなわちそれじたい変動して、より大きくもより小さくもありうる剰余価値を再生産する。資本のこの部分は1つの変量からたえず1つの変量に転化する。だから、わたくしはこれを可変資本部分、もっと簡単に可変資本と呼ぶ」(a. a. O., Bd. I., S. 218. [傍点—原著者])。

ここでひとこと。諸生産手段の調達に支出される資本部分が不変資本と名づけられるのとはまったくちがひ、労働力の買いに支出される資本部分が可変資本と呼ばれるわけは、すでに明らかにされているように、可変資本(v, 賃金支払い額)で手に入れた労働力の使用価値・“生きた労働”によってつくりだされた新価値(v+m)を、資本家が所有できるからである。両資本は、価値運動の関係では本質的にちがう。したがって、同じ資本家の2つの資本部分であるにしても、両者はけっして混同されてはならない。ところが、可変資本のv価値部分がそのまま生産物に移転・保存されるかのように錯覚する謬論がある。“賃金が上がれば、それをうけて生産物の価値もそれだけ上がる”と。賃金が上がっても、労働(一定労働時間の)によってつくられる新価値(v+m)がおなじなら、剰余価値が下がるだけで、生産物の価値にはなんの異変も生じないはずだ。ただ、資本家がそれによる剰余価値の低下を避けるために、競争上ゆるされるならば、生産物の価格引き上げ策を講じようとするのは、よくみられることだが。それはさて、vはとかく不変資本の流動資本(労働対象など)と混同されて、価値移転・保存論で片づけられがちだ。その背後には、“労働の価値”論(“労働力の価値”論ではなく、全労働日・労働時間にたいする賃金支払論)もその一節をなしていよう。だとすると、かんじんの、新価値(v+m)は可変資本(賃金支出部分, v)によって資本家のものとなった労働・“生きた労働”の所産であるという、価値形成・増殖の真相が消えてしまうことになる。v価値の移転論、不変資本と可変資本との無差別論には、“賃金の全労働日支払い論”(“労働の価値・価格論”), 剰余価値の“神秘論”, いわゆる“価格構成論”・“三位一体論”のおとし穴が待ち伏せている。飯田繁『物価の理論的研究』231-5ページ参照。Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. II., S. 867-86. Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 28.

剰余価値(剰余労働の結晶)を“生みの親・可変資本(→生きた労働)”との対比でみるかぎり、生産過程での搾取度が明示される。剰余価値率⁽²⁴⁾ $\left(\frac{m}{v}\right)$, 労働日8時間のばあい、剰余労働時間(たとえば4時間)にたいする必要労働時間(4時間)の比率(100%)は、剰余価値にたいする投下総資本——さいしょのC(c+v)

は増殖して $C' (c+v+m)$ に転化する——の比率 $\left(\frac{m}{c+v}\right)$ ・利潤率とくらべると、剰余価値の生産過程でのなまなましい模様がガラス張りであらわれる。したがって、剰余価値率では、不変資本価値の算入が度外視されている(現実には、もちろん不変資本の諸要因との結合なしには、“生きた労働”は剰余価値を生産できないのだが)だけに、剰余価値 (m) と、それをもたらす労働力購入に投下する可変資本価値 (v) との直接的関係から生まれるところの、一方では労働者にとっての被搾取度と他方では資本家にとっての利得度との対立関係 $\left(\frac{m}{v}\right)$ が純粋にしめされることになる。 $v+m$ の1労働日が一定なら、 v が増大すれば剰余価値率は低下するし、逆に v が減少すれば剰余価値率は上昇する。

②4 Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 220-38.

いまは、剰余価値率から利潤率へ、そのなかでの個別的利潤率から平均的利潤率への展開については論及をさけ(あとですこし)、本題の“貨幣の資本への転化”(→剰余価値の源泉と生産)のしめくりとして、マルクスの1つのかんたんなまとめを利用しよう。

「……貨幣の資本への本来的な転化は、商品生産の経済的諸法則と、そこから由来する所有権とが最高にぴったりと合体しておこる。それでもこんな結果となる。

1. 生産物は資本家のものとなるのであって、労働者のものになるのではない。

2. この生産物の価値は、前貸しされた資本のほかに1つの剰余価値をふくんでいる、この剰余価値は労働者には労働させるが、資本家にはなんの費用もかけないのに、資本家の合法的な所有物となる。

3. 労働者はかれの労働力をずっと持ちつづけ、買い手が見つかるなら、改めてまた売ることができる⁽²⁵⁾」。

②5 a. a. O., Bd. I. Tl. II., S. 614.

b 資本運動のもとでの貨幣運動

貨幣の資本への転化は、量の質的転化（量の増大による質的転換）を意味する。ということは、貨幣と資本との異質性を暗示している。貨幣の本質は商品価値を一般的・統一的に表現する形態（一般的等価形態）であって、それじたい価値増殖とは無縁なものである。これにたいして、資本の本質は価値の増殖を本命とする価値の形態（貨幣形態・生産形態・商品形態・擬制形態）である。貨幣と資本とが異質のもの・ちがう運動をするものとされるわけは、どちらも価値の形態でありながら、貨幣は価値増殖しない・還流しないの⁽¹⁾に、資本は価値増殖して・還流するところにある。貨幣が還流しないのは価値増殖しないからであり、資本が還流するのは価値増殖するからである。貨幣の資本への転化は、歴史的事象としてだけではなく、こんにち日常茶飯事としてたえず見られる。しかも、一方で貨幣は資本へ転化しながら、他方では資本が貨幣（たとえば、賃金・所得など）へ逆転化する。このように、貨幣の資本化とともに資本の貨幣化がおこり、貨幣と資本とが資本主義社会のなかでいつも交錯・並存している。それだけではない。資本の総過程（生産過程と流通過程を包括する）それじたいのなかでは、Gは資本として機能するのに、げんじつの流通過程ではたんなる貨幣として機能する。ともかくも、貨幣の資本への転化によって、貨幣は消滅して・過去の存在と化したのではけっしてなく、現存している。そこで、資本運動のなかでの貨幣運動が問題となるわけだ。単純な商品流通方式（資本主義的な商品流通方式に先だつ）のもとでの“商品と貨幣との関係”が資本主義的な商品流通方式のもとでもどのように貫かれているかを確かめるためにも。

- (1) 「貨幣を生む貨幣」などの表現が『資本論』のなかによくみられる（Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 162, a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 427.）。これは、資本に転化した貨幣の増殖を、あるいは最高度に物神化のすすんだ利子つき資本の段階での自己増殖ぶりを端的にいいあらわしたものである。“貨幣が自然に貨幣を生む”のは“梨の木に梨がみえる”ようなものだ、と。飯田繁『新訂 利子つき資本の理論』148ページ参照。後述。

(1) 資本の諸形態と諸運動

資本主義的な商品流通方式 ($G-W-G'$) が単純な商品流通方式 (W_1-G-W_2) と区別される基本は、だから、価値の増殖と還流にある。 G が方式の起点に立ち、 G' が方式の終点となるのは、価値が増殖して起点に復帰・還流することをしめしている。しかも、 W_1-G-W_2 方式では使用価値の質的転換 (W_1-W_2) という限定目標がめざされているのに対して、 $G-W-G'$ 方式では $G'(G+\Delta G)$ の量的増大という無限の目標がねらいとされているので、復帰・還流点でおなじ運動がたえず更新・拡大される。まえにもみたように、価値の増殖は、一定価値が最終的に支出されるのではなく、回収を条件とする前貸しがおこなわれる流過程によって媒介されなければならないとしても、流過程そのもののなかではほんらいただ等価交換・価値転形がみられるだけであって、価値増殖はおこらない。資本の価値増殖は流過程によって前後媒介される生産過程のなかでしかほんらいおこなわれない。価値は抽象的・一般の人間労働の産物なのだから。

貨幣は商品の形態をとらなければ資本に転化できないのであるいじょう、貨幣の資本への転化は、流過程での“貨幣の商品への転化”からはじまる。貨幣 (G) が商品 (W) の形態をとることなしには資本 (G') に転化しないといわれるわけは、生産過程に先立って火ぶたをきる流過程での $G-W < \frac{A}{P_m}$ にある。 W の 2 要因のうち、労働力 (A) は諸生産手段 (P_m) にたいして主導的な重要役割をはたすところから、前にもちょっとふれたように、 A と P_m との上下の位置づけがあたえられることになる。 $G-W < \frac{P_m}{A}$ ではなく、 $G-W < \frac{A}{P_m}$ で示されなければならない。 $G-W < \frac{A}{P_m}$ は流過程での G (いまは資本としての貨幣・貨幣資本循環の起点にたつ) の前貸しによる資本家の労働力商品の買い入れと諸生産手段の調達である。両商品がげんじつに結合されるのは、労働過程と価値形成・増殖過程との統一としての生産過程のなかである。そのなかで労働力の使用価値 (→生きた労働) が資本家のものとして、諸生産手段の使用価値と

価値に働きかけ、諸生産手段を新生産物に転化する過程に諸生産手段の使用価値と価値（死んだ労働・過去の労働・対象化した労働）を全面的・部分的に、短期的・長期的に新生産物のなかに移転・保存しながら、新価値（ $v+m$ ）を新生産物のなかに付加する（ $W \dots P \text{〔生産資本の過程・生産過程〕} \dots W'$ ）。新価値（ $v+m$ ）のうち、 v は支払い部分として前貸資本の回収部分をなすので資本家の手にのこる利得は不払い部分の剰余価値（ m ）だけとなる。 $W'(W+\Delta W)$ の ΔW が m に相当する新商品形態での剰余価値部分である。 ΔW をふくむ W' は方式のしめくりとして再登場する流通過程で価値どおりに実現されて貨幣形態 G' （ $G+\Delta G$ ）に転化・復帰する。 G からはじまる資本主義的な商品流通方式（ $G-W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W' - G'$ ）は、価値増殖要因を導入する流通過程を皮切りに生産過程での価値増殖を終え、増殖価値をふくむ価値・商品形態 W' の貨幣形態 G' への再転化・実現・復帰を媒介する再流通過程で資本運動のひと幕を閉じる。だが、資本運動のひと幕とは休みないつぎの幕開きである。方式の左極（ G ）と右極（ G' ）とは円形に結ばれる。終点は始点である。というよりは、価値増殖要因は、つぎからつぎにはじまりの流通過程から生産過程へ、生産過程からおわりの流通過程へと、たえまなく自動的に流される。

(1) 「 $G-A$ は、貨幣資本を生産資本に転化する特質的な要因である、というのは、 $G-A$ によって貨幣形態で前貸された価値が資本に、すなわち剰余価値を生産する価値に転化する決定的な条件だからである。 $G-P_m$ は、 $G-A$ をとおして買い入れた労働量を実現するために必要なものにすぎない」（Das Kapital, Bd. II., S. 27.）。

(2) 飯田繁「貨幣から資本へ——易しいダイジェスト集(2)——」（『岐阜経済大学論集』第13巻第1・2号〔昭和54年6月〕46ページ参照）。

資本の本質とされる、いいかえれば、それなしには資本は存立しないとされる“価値増殖”は、生産過程（労働過程と価値形成・増殖過程との統一）のなかでの生産的労働によってじっさいにおこなわれる。しかし、うえにみたように、生産過程に先行する流通過程がなければ、かんじんの生産過程じたいは運動をはじめえないし、また先行する流通過程はあっても後続する流通過程がなければ、生産過程で増殖された価値は起点の貨幣形態で実現され、増幅して還流す

ることができない。そこで、資本は生産過程にだけでなく、流通過程にも投下されなければならない。そしてまた、⁽³⁾ 剰余価値が生産されない流通過程に投下される資本・流通資本・商業資本も“資本（増殖する価値）であること”では、剰余価値が生産される生産過程に投入される資本・生産資本・産業資本となん
のちがいもない。流通資本がたとえ非生産的な（価値・剰余価値を生産しない）資本であっても必要不可欠な資本であるいじょう、投下資本の数量に相応するだけの価値増殖には生産資本とまったく同格に恵まれなければならない。さもなければ、流通過程から資本はすっかり姿を消してしまうだろう。そうなると、生産過程での剰余価値の生産も不可能となる。

- (3) いまは叙述を簡単・平易にするために、「流通過程のなかにまで、また流通過程のために延長された生産過程」(Das Kapital, Bd. II., S. 146. 保管業・運輸業での価値形成・増殖過程, Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 131-46.) についてはふれない。

価値増殖（剰余価値の生産）に直接参加しようとしまいと、必要不可欠のものとして出場しなければならないかぎり、資本は“資本として”剰余価値の分け前にあずかり、それじたい“価値増殖”しなければならない。剰余価値の生産関係と配分関係とはもはや直結しない。個々の資本へ配分される剰余価値は利潤の形態をとる。なぜならば、剰余価値は可変資本の産物としての形態であり、不変資本をふくめた投下総資本の産物としては剰余価値は利潤の形態に転化するのだから。剰余価値（率）の利潤（率）化とともに、価値増殖の生産源泉・“生きた労働”はおおいかくされ、不透明になる。剰余価値（ m , 剰余価値率 $\frac{m}{v} = m'$ ）が可変資本（ v ）の産物——じつは、 v の投入によって資本家がわがものとする労働力の使用価値（→生きた労働）の産物——として、分子・分母比率で表示されるかぎりでは、剰余価値（率）⁽⁵⁾ の生産・成立事情が本質的にとらえられる。ところが、剰余価値が可変資本（ A, v ）と不変資本（ Pm, c ）の合計としての投入総生産資本（ C ）の所産・利潤（ $p [= m]$, 利潤率 $\frac{p}{c+v} = \frac{p}{C} = p'$ ）の形態であられるようになると、価値増殖の生産的根源・対立的な人間関係の真相は物化され見えなくなる。それにまた、剰余価値を生産しない流通資本がこの利潤の配

(6) 分に加わると、さらにまた、資本の競争⁽⁷⁾によって個別的利潤率の均等化・平均利潤率化が進展するようになると、その物化・物神化の程度はいよいよすすむ。

(4) いまさらでもないことだが、つぎのマルクスの文章は、剰余価値を生産するうえでの可変資本と、それによって資本家がえた“生きた労働”との関係を精密に説いている。「労働力の購買に前貸しされた資本部分（可変資本—飯田注）は対象化された一定の労働量であり、したがって購買した労働力の価値とおなじく不変の価値量である。しかし生産過程じたいでは、前貸しされた90ポンド・スターリングのかわりに活動する労働力が、死んだ労働のかわりに生きた労働が、不動量⁽⁸⁾のかわりに流動量が、不変量⁽⁹⁾のかわりに可変量があらわれる。その結果は、 v の再生産プラス v の増殖である。資本主義的生産の立場からみると、この全経過は、労働力に転化された、本来的には不変である価値の自己運動である」（Das Kapital, Bd. I., S. 222.〔傍点—原著者〕）。

(5) 「……剰余価値率は資本による労働力の、あるいは資本家による労働者の搾取度（Exploitationsgrad）の正確な表現である」（a. a. O., Bd. I., S. 226.〔傍点—原著者〕）。

(6) 商業利潤（マルクスは譲渡利潤〔Veräußerungsprofit〕とも呼んでいる。Vgl. a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 426.）は生産過程で生産された剰余価値の一部分であって、商業資本家は商品を商業利潤部分ぬきで買い入れ、商業利潤こみで（それでもなお、商品を価値どおりに）売る。「産業資本が剰余価値としてすでに商品価値にはいつている利潤だけを実現するのとおなじように、商業資本は、全剰余価値または全利潤が産業資本によって売られる商品価格ではまだ実現されていないので、その分だけの利潤を実現する。商品の販売価格は購入価格をこえてはいるが、販売価格が総価値（商品価値—飯田注）を上回るからではなく、購入価格が総価値を下回っているからである」（a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 317.）。「……かれ（商業資本家—飯田注）は流通のなか・流通をとおしてだけ、そして購買価格以上の販売価格の超過分によってだけ、かれの利潤をかちとる。かれは諸商品とその価値以上・その生産価格（平均利潤をふくむ—飯田注）以上に売るのではない。というのは、まさしく、かれが産業資本家たちから諸商品を価値以下・また生産価格以下で買ったからこそなのだ」（a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 315-6.）。Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 112.

「……店員たち（Kommis）の不払い労働は剰余価値をつくりだすのではないが、商業資本家に剰余価値をえさせる（schafft Aneignung von Mehrwert）。これは結果的には商業資本にとってはまったく同じこと、つまり利潤の源泉となる。……（改

行) 労働者の不払い労働が生産資本にとっては直接に剰余価値をつくりだすのとおなじく、商業賃労働者たちの不払い労働は商業資本にその剰余価値の分け前 (Anteil) をつくりだす」(a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 325.)。

- (7) 資本の競争は2つのちがう結果をもたらす。1つは、同一種類商品の生産部門内部での資本競争による市場価値 (いわゆる一物一価) と超過剰余価値 (“強められた労働”) による個別的価値の低下とそれをこえる社会的価値との差額) の成立。もう1つは、異種類商品の生産部門相互間での資本競争による平均利潤とそれをふくむ生産価格の成立。「競争がまず1つの部面で果たすのは、諸商品の種々の個別的価値から1つの同じ市場価値と市場価格を形成することだ。ところが、いろいろな部面での諸資本の競争は、それぞれ違う諸部面間の利潤率を均等化する生産価格をはじめをつくりだす。後者にとっては、前者にとってよりも、資本主義的生産方法のいっそう高い発展が必要である」(a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 205-6.)。なお、競争の一般的原则については、Vgl. a. a. O., Bd. I., S. 331。

一方では平均利潤をこえる超過利潤 (それを含む市場価値・市場価格) をもたらし、他方では平均利潤 (それを含む生産価格) を形成する2つのちがう資本競争はたがいに矛盾し、両立できないかのようにみえる。しかし、げんじつには両者は矛盾しないし、並立できる。平均利潤をこえる超過利潤の成立は、同一種類の商品がたとえどんなにちがう生産条件のもとで生産されようとも、つまり労働生産力差のひらきで商品の個別的価値がどんなにちがっていても、同一の市場価値・市場価格で売られるところから生じるのであって、異種類商品生産部面にはなんの影響もあたえるものではない。同一種類商品生産部面の内部で成立する、一方の資本家たちにたいする平均利潤を上回る超過利潤 (市場価値よりも個別的価値が小さい) は他方の資本家たちにたいする平均利潤を下回る過小利潤 (市場価値よりも個別的価値が大き) によって相殺され、同一種類商品生産部面ぜんたいとしては異種類商品生産部面間の平均利潤 (率) に帰着するのだから。異種類商品の生産部面相互間で平均利潤 (率) が資本競争の結果として成立することになるのは、もともと資本の有機的構成 (技術的構成と価値構成との総括) のちがいや資本の回転期間のちがいなどにもとづく個別的利潤 (率) の差異が、資本の価値増殖にたいする熱烈な指向性からとうぜん排除されなければならない1つの目標としてかけられるのだからである。なお、資本の競争がすすむにつれて、異種生産部面のあいだで成立する平均利潤 (率) は、資本の有機的構成の高度化 (不変資本にたいする可変資本の比率構成の低下) などによって一般的低下傾向をますますつよめる。Vgl. a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 166-296。

資本は始点を終点とする、いいかえれば終点を始点とする復帰・還流・循環の運動をたえまなく繰り返す。価値増殖が等質物の量的増大を意味するとこ

ろから、資本の運動はほんらい一般的には貨幣形態の価値・貨幣資本を始点 (G)・終点 (G') とする。しかし、貨幣資本の循環運動は、生産過程で機能する資本・生産資本を始点 (P)・終点 (P') とする循環運動の視角から、さらにもう1つ、生産過程のなかで仕上がる資本の商品形態・商品資本を始点 (W)・終点 (W') とする循環運動の視点からも見直されうる。こうして資本の循環を貨幣資本・生産資本・商品資本の3視点からとらえると、内容分析はいちだんと豊富に、そして鮮明になる、そしてまたそれによって、生産過程で増殖した価値・剰余価値(率) → 個別的利潤(率) → 平均利潤(率) の資本への追加投入・再生産による資本の単純再生産方式から拡大再生産方式への展開過程もはっきりとつかめることになる。

(8) Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 23-115.

(9) Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 395-529.

生産資本だけではなく、流通資本(貨幣資本と商品資本)をも包括する全体としての機能資本(現実資本)相互間の競争で成立する平均利潤(率)では、上述のように、その成立根源としての剰余価値(率)の v と m との、必要労働(時間)と剰余労働(時間)とのあいだのなまなましい人間そごの対立関係は物的におおわれて見えなくなる。しかしそれでもなお、そこでは価値増殖がじっさいに一般的ながらも資本機能と結ばれている。ところが、それじたいとしては、現実の機能過程(生産・流通過程)のなかにはいりこまないで、その外部・枠外に所有資本としてでんと鎮座したままで、貨幣を資本として、“資本としての商品”・“ひとつの独特な商品”⁽¹⁰⁾としてたんに譲渡するだけで (G が位置転換するだけで)、つまり貸付け・回収してたえず価値増殖 ($G - [G \cdots P \cdots G'] - G$, $G - G'$ に短絡)をとげている資本群もある。現実資本の派生的形態としての利子つき資本(さらに擬制資本としての有価証券など)である。利子つき資本・銀行資本の還流運動のもてくりかえされる価値増殖は、機能資本のそれとはちがひ、平均利潤の1分割部分である利子についておこなわれる。平均利潤が量的に2分されて、貸し手の利子つき資本家には利子が、借り手の機能資本家には企業

者利得があたえられることになる⁽¹¹⁾と、平均利潤の量的分割は質的分割に転化する。利子と企業者利得との源泉が、おなじ剰余労働(時間)→剰余価値であるという真相はもはやすっかり消え去り、それとはまったく無縁なものとして、両者はたがいに対立する。企業者利得が機能資本家たちによる監督労働の所産としてあらわれるのにたいして、利子はそれじたい資本機能から遊離した資本所有⁽¹²⁾(所有としての資本)の“自然的果実”として、“ひとつの独特な商品”の“価値・価格”⁽¹³⁾として最高に物神化される。必要労働(時間)・賃金(v)と剰余労働(時間)・剰余価値(m)との割合をめぐる労働者と資本家との対立関係は、そこでは“あたえられた”平均利潤のなかでの利子と企業者利得との分割をめぐる“資本家どうしの”対立関係に転化してあらわれる。それはともかくとして、資本の本質と運動の問題は、“価値増殖をめざす還流”と一括していえても、その様式・内容は資本の諸形態に応じてまちまちで、資本の物神化がすすむにつれて本質的な生産関係はみえなくなり、最終的にはひとつの神秘的な自然現象としてしか見えなくなる。

(10) 「貨幣——……——は資本主義的生産の基礎の上では資本に転化せらる。そしてこの転化によってある与えられた価値からそれじたい増殖し・増量する価値となる。それは利潤を生産する、すなわちそれは、ある一定量の不払労働、剰余生産物そして剰余価値を労働者たちからひき出して資本家たちのものにするを可能にする。こうして貨幣は、貨幣としてもつ使用価値のほかには1つの追加的使用価値、すなわち資本として機能する使用価値をうけとる。貨幣の使用価値は、ここではまさに、貨幣が資本に転化して生産する利潤にある。可能的資本としての、利潤生産の手段としてのこの属性で、貨幣は商品、しかしひとつの独特な(sui generis (eigener Art))商品となる。あるいは、おなじことだが、資本は資本として商品となる」(Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 370-1.)。飯田繁『新訂 利子つき資本の理論』35—95ページ参照。飯田繁『利子つき資本』237—61ページ参照。

(11) Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 404-26. 『新訂 利子つき資本の理論』96—143ページ参照。

(12) 貸付資本(利子つき資本)家は貸しつけた資本部分の所有者である。いいかえれば、借り手の機能資本家はその借入資本部分を所有することはできない、それを一時的に占有・処理することはできても。だからこそ、貸しつけられた資本は一定期間の

後には、所有者である貸付資本家の手もとに価値増殖・回収・還流しなければならないわけだ。「貸付資本家は等価をうけとらないで、かれの資本を手ばなす、すなわち、産業資本家の手にわたす。……所有権はわたさない。……貨幣が産業資本家の手から貸付資本家の手に復歸するのは、資本の手ばなしという第1行為を補足するだけのことだ」(Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 380.)。『利子つき資本』201—35ページ参照。貸しつけられた資本は貸し手・貸付資本家にとってはそれじたい機能しない所有資本である(借り手・機能資本家にとっては、機能資本となる)ところから、それにつく利子は、ほんらい借り手・機能資本家のもとで成立する平均利潤の1分割部分でありながらも、資本機能・機能資本とは切りはなされた資本所有・所有資本の自然的な産物のようにみえる。『利子つき資本』201—35ページ参照。

- (13) 利子つき資本は2重に本質規定されている。1つには“所有としての資本”(所有資本)として、2つには“ひとつの独特な商品”として。利子つき資本を“ひとつの独特な商品”として、利子を“ひとつの独特な商品”の“価値・価格”として規定することは、貨幣の資本への転化の基本を解明する労働力の商品(“ひとつの独特な商品”)化論につづくものとして、したがってまた『資本論』での商品論一貫性を示すものとして注目される。ただその商品論の物神性は、資本主義の分析・叙述がすすむのにつれて、しだいに高まる。利子つき資本の段階では、平均利潤(あるいはそれを生む能力)は“ひとつの独特な商品”の“使用価値”として、利子は“ひとつの独特な商品”の“価値・価格”としてあらわれることじたいが、まさしく利子つき資本そのものの最高物神性(そしてまた最高擬制性)を表示している。Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 385—91。『新訂 利子つき資本の理論』68—95ページ参照。『利子つき資本』263—311ページ参照。飯田繁「利子つき資本(利子生み資本, 貸付資本)」(岩波書店『経済学辞典』第2版, 305—6ページ)参照。

資本の増殖・還流運動は、このように、生産過程と流通過程をふくむ機能過程 $(G-W \xrightarrow{P_m} \dots P \dots W'-G')$ だけではなく、機能過程の前後によこたわる粹外の“銀行信用”過程・“独特な流通”過程 $(G-(G-W \dots W'-G')-G')$ 、かんたんに表示すれば、〔 〕内を除いた $G-G'$ にまで波及する。こうして、それぞれの過程内での資本機能・資本所有のあり方や価値増殖の仕方はさまざま——生産過程の基盤を遠ざかれば遠ざかるほど、価値増殖の社会的・人間的関係の真相はおおわれ、物化され、自然現象化されるのだが——ながらも、一定期間後には始点の価値が増殖して終点・再始点に復歸・還流することじたいにはなんの違ひもない。

- (14) Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 436—52。『新訂 利子つき資本の理論』185—

210ページ参照。

- (15) Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 372-83. 『新訂 利子つき資本の理論』47—9ページ参照。

(2) 資本の現実的流通過程

価値増殖は、くりかえし見てきたように、げんじつには生産過程でしかおこなわれない。しかし、生産過程で価値増殖がおこなわれるためには、さいしょの価値(貨幣形態→商品形態)を生産形態に転換して生産過程へ導入する前段の流通過程と、生産過程で増殖した価値(商品形態)を貨幣形態へ再転換する後段の流通過程が必要不可欠な要因となる。流通過程じたいのなかでは価値は増殖しなくても、流通過程の媒介なしには価値は増殖へスタートすることもできなければ、増殖したあと出発点へ復帰・還流することもできない。それで、流通過程は生産過程とともに価値増殖の機能過程とみなされ、生産資本とともに流通資本は機能資本を形成する。流通過程でとる価値の形態である貨幣と商品も、流通資本の2形態・貨幣資本と商品資本と呼ばれる。貨幣・商品が、生産過程をふくむ総過程では貨幣資本・商品資本(増殖する価値)の形態をとるといふことは、しかしながら、流通過程でしか存在・機能しない貨幣・商品がそれじたい流通過程のなかで価値増殖する資本として存在・機能することを——たとえ、そのように見えようとも(物神化しても)——意味するのではない。単純な商品流通方式(W_1-G-W_2)でとおなじく、資本主義的な商品流通方式($G-W-G'$)⁽¹⁾でも、価値は“現実的(げんじつの)流通過程”のなかでは増殖しない。なぜか。

- (1) ここに“現実的流通過程”あるいは“げんじつの流通過程”(der wirkliche Zirkulationsprozess)というのは、さきにちょっと触れた“独特な流通”(die eigentümliche Zirkulation)過程と区別される用語である。 $G-W, W'-G'$ の流通が“げんじつの流通”であり、銀行信用によって媒介される $G-[G-W\cdots W'-G']-G'$ のワク外の $G-, -G'$ が“独特な流通”・“独特な運動”(die eigentümliche Bewegung, 利子つき資本の流通・運動)である。Vgl. Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S.

“独特な流通”のなかでは、Gを譲渡する（貸し付ける）だけで最高物神的に価値増殖する利子つき資本（“資本としての商品”・“ひとつの独特な商品”）が登場する。そこでは、価値の形態転換でなく価値の位置転換だけがおこなわれるという点で、“げんじつの流通過程”とはまったくちがう。しかし、利子つき資本の価値増殖がそれじたいの運動過程でおこなわれるのではなく、生産過程での剰余価値生産の結果に依存するという点では、“げんじつの流通過程”で機能する資本と基本的にまったくおなじだ。これらの諸事情については、いまは触れない。

W_1-G-W_2 方式のGが価値増殖しない・還流しないのは、使用価値の転換（ $W_1 \rightarrow W_2$ ）を目的として、中間のGが「最終的に支出される」のにたいして、 $G-W-G'$ 方式のGが価値増殖して還流するのは、始点のGが「前貸しされるだけ」だからである。 W_1-G-W_2 方式ではGは商品の転化形態として機能するだけであって、売りによる W_1 の転化形態としてのGは、やがて買いによって W_2 （あるいは、さらにその他の諸商品）への転化形態に変身して流れ去り、変身がくりかえされるのにつれて、Gの流れはその始点から遠ざかるばかりだ。⁽²⁾そこでは原則として純粋に等価交換（ $W_1=G=W_2$ ）が前提され、価値のうえではなんの損得もあたえない使用価値の転換だけ（相互交換ではない）。 W_1 の所有者・売り手は W_1 を手ばなして W_2 を手に入れるが、 W_2 の所有者・売り手は必ずしも W_2 を手ばなして W_1 を買うのではない）が最終的にめざされている。貨幣が流通手段機能を脱皮して支払機能にすすんでも、ことがらに変わりはない。使用価値の転換が、商業信用・貸借関係と絡みあい、序列のうえで逆転され、時間のうえで延長されるだけのことだから。いずれにせよ、 W_1-G-W_2 ではおそかれ早かれ W_1 とGとの、Gと W_2 との交換・転形によって等価がたがいに受けとられ、相互の所有権・所有物（ W_1, G, W_2 ）の内容は変わるが、そのたびに関係は終結する。

(2) Vgl. Das Kapital, Bd. I., S. 119. Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 343.

$G-W-G'$ 方式での流通過程は W_1-G-W_2 方式での流通過程とはちがうのか。ちがうとすれば、どちらがうのか。G-W-G'方式では、Gは「最終的

に支出される」のではなく、「前貸しされるだけ」だという点で、さきの $W_1 - G - W_2$ 方式とは根本的にちがう。 G はたんなる貨幣としてではなく、増殖・還流する“資本としての貨幣”(貨幣資本)として方式の始点にたち、げんじつの流通過程への第1歩をふみだす。ところが、「前貸しされるだけ」の“資本としての貨幣”は、ひとたびげんじつの流通過程のなかにはいると(精密にいえば、げんじつの流通過程のなかにはいる段階で)、たんなる貨幣としてしか機能しない。ここにたんなる貨幣というのは、資本とのちがいをさすのであって、その内容が金であれ、金代用物(流通手段としての、または支払手段としての)であれ、ここでは問われない。売買行為がおこなわれる“げんじつの流通過程”のなかでは、価値は貨幣形態をとろうと商品形態をとろうと、価値の形態を変えるだけであって、“増殖する価値”・資本として機能することはできない、たとえ資本の流通過程のなかであろうとも。価値増殖の生産過程を中心とするげんじつの流通過程にわたる全過程視点に立てば、 G にせよ、 P にせよ、 W' にせよ、資本の循環運動をたえずくりかえすのが $G - W < \overset{A}{P_m} \dots P \dots W' - G'$ 方式の特性なのだが、そのなかの“げんじつの流通過程”($G - W$, $W' - G'$) だけにかぎってみると、 G , G' (資本としての貨幣, 貨幣資本) はたんなる貨幣として、 W' (商品資本, W の P_m 部分も) はたんなる商品として機能するという点では、 $W_1 - G - W_2$ の W , G となんのちがいもない。流通の第1段階と第2段階との売買序列は逆転されているのだが。しかし、 $G - W(\dots W') - G'$ 方式では、 G , W , W' , G' は同時にまた、生産過程と流通過程とを内包する総過程視角からは、 $W_1 - G - W_2$ 方式にはまったく見られなかった資本循環運動の一環をそれぞれ荷なっている。だから、 G , W , W' , G' は、一方では貨幣資本・商品資本として、他方ではたんなる貨幣・商品としての、それぞれにちがう2つの顔をもって総過程のなかをわたり歩く、まさに $W_1 - G - W_2$ 方式のもとではぜんぜん見られない風景である。

(3) (4) 『資本論』第2巻でマルクスは、貨幣資本・商品資本(“げんじつの流通過程”のなかでしか機能しない資本)が資本総循環過程の一環を荷ないながらも、げんじつ

にはそれぞれ貨幣・商品として機能するだけのものであることをくりかえし説いている。

「……貨幣状態にある資本価値もやはり貨幣諸機能を果たさせるだけで、ほかの機能はなにも果たせない（貨幣資本は流通資本の1形態なのだから一飯田注）。この貨幣諸機能を資本諸機能にしているのは、資本の運動でのそのの一定の役割である。だから、貨幣諸機能があらわれる段階と資本循環のその他の諸段階との関係もそうだ」（Das Kapital, Bd. II., S. 26.）。Vgl. a. a. O., Bd. II., S. 73. 「……生産過程じたいが産業資本の生産的諸機能としてあらわれるのとおなじように、貨幣と商品は同一産業資本の流通形態として、したがってまた、貨幣と商品の諸機能は産業資本の流通諸機能（商業資本として分業化するまえのこと一飯田注）としてあらわれる。それらの流通諸機能は、生産資本の諸機能を導入するか、これらから生じるかだから。貨幣機能・商品機能はつぎのようなばあいは、同時に貨幣資本機能・商品資本機能でもある。産業資本が、その循環過程のいろいろな段階で果たすべき諸機能形態として貨幣・商品機能と関係するばあいにかぎって」（a. a. O., Bd. II., S. 77.）。

『資本論』第3巻ではマルクスは、ただ貸しつけ・譲渡される（価値の位置転換）だけで価値増殖する“資本としての商品”・“ひとつの独特な商品”・利子つき資本の特殊性・最高物神性を解明するために、そこでの“独特な流通”過程とはまさに対照的な“げんじつの流通過程”での貨幣資本・商品資本の機能についてくりかえし詳しく論じている。

「生産資本が商品資本に転化すると、すぐさま商品資本は市場に投げられねばならず、商品として売られねばならない。市場では商品資本はたんに商品として機能する。資本家は市場ではただ商品の売り手としてあらわれる。ちょうど買い手（買い手である資本家一飯田注）が商品の買い手としてあらわれるのとおなじように。……流通過程では、商品資本は資本としてではなく、商品としてだけ機能する」（Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 374.）。「……それ（貨幣資本）は貨幣資本としては、事実上ただたんに貨幣として、すなわち商品（生産諸要因）の購買手段として作用するだけだ。この貨幣がここでは同時に貨幣資本であり、資本の1形態であるということは、購買の行為から、貨幣資本がここで貨幣として果たす現実的機能から生じるのではなく、この行為と資本の総運動との関係から生じる、というのは、貨幣資本が貨幣として果たすこの行為が資本主義的生産過程を導入するのだから」（a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 375.）。「……資本が実現された資本、増殖された価値として存在するこの復帰点では、……資本は流通にはいりこむものではなく、むしろ流通から引き揚げられるもの、総過程の結果としてあらわれる。この資本がふたたび支出されるとすぐさま、それは資本として第三者に譲渡されるのではなく、たんなる商品として売られる

か、商品にたいするたんなる貨幣としてわたされる。資本はその流過程ではけっして資本としてではなく、ただ商品または貨幣としてあらわれるのであって、この商品または貨幣はここでは他者にとっての資本の唯一の定在である。商品や貨幣がここで資本であるのは、商品が貨幣に転形し、貨幣が商品に転形するからではなく、買い手または売り手にたいするそれらの現実的諸関係のなかにあるのではなく、ただそれらの観念的な諸関係……のなかでだけのことだ。資本として資本が存在するのは、流過程での現実的運動のなかではなく、生産過程での、労働力の搾取過程での現実的運動のなかでだけだ」(a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 375-6. [傍点—原著者])。

「げんじつの流過程では、資本はいつも商品または貨幣としてだけあらわれ、資本の運動は一連の買いと売りに帰着する。かんたんについて、流過程は商品の姿態変換 (die Metamorphose) に帰着する。再生産過程の全体を観察するならば、うえとはちがう。もしわれわれが貨幣から出発すると (商品から出発するとしても、同じことだ、……)、ある貨幣額が支出されて、一定期間後には1つの増加分とともに復帰する。前貸し貨幣量にたいする補充分がプラス剰余価値で帰ってくる」(a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 377.)。「貨幣としての、または商品としての価値額が機能する流過程の $G-W$ と $W(W'-飯田注)-G'$ は、ただこの価値額の総運動の媒介過程・個別契機にすぎない。資本としては価値額は $G-G'$ の総運動を経過している。それは貨幣またはなんらかの形態での価値額として前貸しされ、価値額として復帰する」(a. a. O., Bd. III. Tl. I., S. 383.)。なお、「流通資本としての貨幣資本」(あるいは商品資本) と「利子つき資本としての貨幣資本」(あるいは“ひとつの独特な商品”) とのちがいについては、『新訂 利子つき資本の理論』54—64ページ参照。

このように、資本の現実的過程では“資本としての貨幣”(流通資本としての貨幣資本) はたんなる“貨幣としての貨幣”(たんなる貨幣) として機能する。またそこでは、商品資本はおなじようにたんなる商品として機能する。ところで、 G がたんなる貨幣として機能するということは、 G が出発の始点に復帰・還流しないで、流通機能をつづければつづけるほど、ますます始点から遠ざかる(これとはちがひ、まえに W_1-G-W_2 方式でみたように、 W_1 は W_2 に姿態を変えて復帰する) ということである。資本としての G は始点に復帰・還流するのに、貨幣としての G が始点に復帰・還流しないとは！ さも $G-W(\dots W')-G'$ 方式のなかでの解明できない1つの矛盾であるかのようにもみえよう。しかし、そのことはけっして“矛盾”ではない。なるほど始点の G はただひとつ、しかも

Gの歩く道はひとつしかない。“げんじつの流通過程”でまず $W \leftarrow \overset{A}{Pm}$ に転化されたGがどこへ転々と遠のいてゆこうと、Gの所有者・ $W \leftarrow \overset{A}{Pm}$ の買い手である資本家にとってはどうでもよいことだ。始点のGに代わって手に入れたAとPmとを生産過程で結合してW'をつくり上げ、後続の“げんじつの流通過程”でW'(W+w)をG'(G+g(ΔG))に転化すれば、始点のGはgとともに復帰・還流する。W'の買い手(G'の所有者)は、手ばなしたG'の代わりにW'を手に入れるのだから、G'がどこへころんでゆこうとまったく気にしない、それが始点Gの所有者の手もとに還流するgこみのG'であろうとは知るよしもない。資本運動の総過程視点では円形に還流するGは、たえず形態を変えながら前後の“げんじつの流通過程”のなかをひと筋に前へ前へと通りぬけるだけで、後へ引きかえすことはない。もっとこまかくさいしょの $G \leftarrow \overset{A}{Pm}$ についてみよう。G—Aの“げんじつの流通過程”で、Gの所有者(資本家)が労働者に前貸し(あるいは後払い)する労働力価値部分のGは、やがて労働者の賃金・所得として“げんじつの流通過程”で生活・文化用品の買入れに支出される。すると、Gは労働者の手から、ましてやさいしょの資本家の手から遠ざかり復帰・還流しない。それでもなお、資本家はW'のG'への転化によってG—Aの価値部分(gの増加分は別)を貨幣形態でとりもどす。G—Pmについて支出されたGの行方も不明となるが、W'のG'によってPmの移転・保存価値部分は短期的・長期的に貨幣形態でとり返される。A、Pmに支出された始点のGが復帰・還流するのは、あくまでも総過程視点での資本機能・運動にもとづくのであって、Gが“げんじつの流通過程”のなかでたんなる貨幣としておこなう商品の売り・買いによるのではない。

(5) Vgl. Das Kapital, Bd. II., S. 23-58.

ところが、再生産過程の分析で対象としてあげられる生産財生産部門(Klasse I)のI(v+m)と消費財生産部門(Klasse II)のIIcとの相互交換・“I(v+m)=IIc”では、相互の商品交換を媒介するGが出発点に復帰・還流すると説かれる。ここでは、Gは資本機能を果たすのではないのに、なぜ始点に復帰・還流

するのか。もっとも単純な W_1-G-W_2 方式では W_1 と W_2 とは相互交換されないものと前提されていた。しかし、もし一方で W_2 を買うために W_1 を売る人と、他方では W_1 を買うために W_2 を売る人とが市場で出会ったとすれば、貨幣経済のもとでは商品の相互交換のための媒介手段としての貨幣をさいしょに支出した人の手に売買のあげく復帰・還流しよう。I (v+m) と II c と（あるいは逆転）の相互交換関係においてもことがらは同じだ。生産財生産部門の再生産用可変資本部分・資本家や労働者の生活用消費手段などに向けられる製品・生産手段 (I v+m) と、消費財生産部門の再生産用不変資本部分・生産手段に向けられる製品・消費手段 (II c) とが相互交換されると、交換・売買のために支出された貨幣はさいしょの支出者の手にもどる。⁽⁶⁾

(6) Vgl. Das Kapital, Bd. II., S. 395-529. 『新訂 利子つき資本の理論』346—7ページ, 394ページ参照。

資本の“げんじつの流過程”で G, W が資本としてではなく、たんに貨幣・商品として機能するということは、一步すすめて考えると、 W_1-G-W_2 方式のもとでとおなじく、 W が G をリードし、 G が W にフォローすることを意味する。方式のうえで W が G に先行しようと ($W-G$)、 G が W に先行しようと ($G-W$)、 W が G をリードし、 G は W にフォローすることにかわりはない。 G はしよせん W の価値形態・一般的等価形態としての本質をもって商品群のなかから発生したものであるいじょう、 W (価値) なしには G (価値形態) は存在しないという宿命をになっている。 G がたんなる貨幣・一般的等価形態としてしか機能しないかぎり、たんなる商品として機能する W をリードすることなどできる業ではない。だからこそ、実現されるべき諸商品の価格総額 (リード) によって流通に必要な金量・貨幣量が決定される (フォローする) という単純商品流通方式での貨幣流通の諸法則が資本主義的な商品流通方式でも基本的にはそのままあてはまる。⁽⁷⁾ そしてまた、流通必要金量のフォロー性にもとづいて、貨幣の資本化、銀行信用を前提とする兌換銀行券の流通必要量のフォロー性も規定されることになる。⁽⁸⁾ 他面、価値表章としての紙幣の運動法則 (“紙幣

流通の独自の「一法則」・紙幣インフレーションの法則)を基盤として、不換銀行券⁽⁹⁾(兌換銀行券の否定)の資本主義的インフレ現象が正しくつかめることにもなる。これらの諸法則は、すべて商品運動が主体的動因として貨幣(代用貨幣)流通を積極的・能動的にリードするという客観事態のうえに成立したものである。ところで、商品がアクティブにリードし、貨幣はパッシブにフォローするというこの基本原理は、たんに現実資本・機能資本の“げんじつの流過程”のなかだけではなく、それからはなれたワク外の資本運動のなかでも見られる。“独特な流通”過程(利子つき資本の運動過程・銀行信用過程)での“資本としての貨幣”の運動は、リード役としての商品・商品資本側からの貸付要請をいつも内に秘めて待機している。商品・商品資本側から需要・貸付要請があればこそ、貸付資本は発動できるのだ。もっとも、真相はおおわれて逆転現象化(物神化)するのではあるが。いまはこれらには触れない。

- (7) 「商品流通(……)での流通貨幣量にかんしてうちたてられたすべての法則は、生産過程の資本主義的な性格によって変えられるものではない」(Das Kapital, Bd. II., S. 332.)。
- (8) 「げんじつに流通する貨幣の数量は、流通の速度と諸支払いの節約とがあたえられていると前提すれば、諸商品の価格と諸取り引きの数量でまるといふことは、すでに単純な貨幣流通を観察したさい(……)に指摘されている。おなじ法則が銀行券(兌換銀行券—飯田注)の流通でも支配する」(a. a. O., Bd. III. Tl. II., S. 567.)。「……流通する銀行券(兌換銀行券—飯田注)がいつでも貨幣と交換されうるのであるかぎり、流通する銀行券を増やすことは銀行券を発行する銀行の手のうちにあるのではない」(a. a. O., Bd. III. Tl. II., S. 569.)。『新訂 利子つき資本の理論』378—88ページ参照。なお、参考までにひとこと。マルクスは次のようにも記している。「……これら(兌換銀行券など—飯田注)は金属貨幣の流通であれ、国家紙幣の流通であれ、貨幣流通にもとづく(beruhen, 上に立つ)のではなく、手形流通にもとづく」(Das Kapital, Bd. III. Tl. I., S. 436.)。この一文は、兌換銀行券の流通が貨幣流通の諸法則によって支配されることを否定しているかのようにみえるが、そうではない。『新訂 利子つき資本の理論』200—2ページ参照。飯田繁『現代銀行券の基礎理論』97—9ページ参照。
- (9) 「(……不換銀行券は、たとえばげんざいロシアでのように、それがじっさい国家信用によって支えられるばあいだけに、一般的な流通手段になれる。それとともに、不

換銀行券はすでに展開された〔……〕不換国家紙幣の諸法則の支配にしたがう——F. エンゲルス〕(Das Kapital, Bd. III. Tl. II., S. 569.)。『新訂 利子つき資本の理論』384ページ参照。

5 おわりに

商品から貨幣へ、さらに貨幣から資本へと転化のプロセスがすすむのにつれて、価値の形態はだんだんと多様化し、複雑化する。貨幣を、そしてまたいちだんと進んだ資本を正しく理解するためには、スタート・ポイントに立つ商品の内容把握が決定的に重要となる。マルクスは『資本論』第1版の序文で「すべて初めが困難だ、とはどの科学でもいえる」と書き記している。商品の、とりわけ価値形態のつかみにくさについて述べたものである。価値形態をつかむためには、“使用価値と価値との統一物（矛盾の統一物）”としての商品の内容規定を正しく知らなければならない。だから、商品としての労働生産物を共同（共有）社会の労働生産物と無差別にたんなる使用価値・たんなる物として素朴にとらえるのでは、価値形態→一般的等価形態として商品社会のなかから発生した貨幣を、ましてやいっそうすすんだ社会関係を背景とする価値形態・資本を理解することはできない。

貨幣の資本への転化の段階では、ぜったいに欠かせない決定的な主役を演じる労働力が登場する。ところで、この労働力をマルクスはひとつの商品（正確には普通商品とは区別される独特な・特殊な商品）・“使用価値と価値との矛盾の統一物”として規定した。そしてそこでは、労働力という独特な商品の使用価値（ $v+m$ の生産源である労働）と労働力の価値（ v ）との差額（ m ）・不払い・剰余労働の結晶としてあらわれ、しかもとうぜん労働力商品の買い手（資本家）のものとなる剰余価値→利潤——同時にまた労働搾取・労働疎外——の論理が鮮明に説かれる。この論理の展開はまさに『資本論』全叙述のなかの圧巻である。ほかのどの経済学者が資本主義経済の基盤・剰余価値→利潤を労働力商品の論理

で解明できたことか。マルクスは労働力商品の分析・生成、そこから導かれる剰余価値→利潤（個別的→平均的，超過利潤）などの資本問題解明に『資本論』の克明な叙述のほとんどを投入した。まさに“資本論”である，とともに“商品論”でもあり，“貨幣論”でもある。『資本論』での商品論展開の一貫性（アルファであり，オメガである）は，資本の最終形態・利子つき資本の理論化にまでおよぶ。“資本としての商品”（譲渡されるだけで価値増殖する商品）・“ひとつの独特な商品”（用語はおなじだが，労働力商品という“独特な商品”とはちがう，念のため）論がそれである。それはともかくとして，問題をもとへかえそう。

商品が貨幣へ転化したら，商品はどうなるのか。また，貨幣が資本へ転化したら，貨幣はどうなるのか。商品社会のなかから一般的等価形態としての貨幣が発生すると，商品と商品との直接的交換（ W_1-W_2 ）は貨幣を中間項とする商品流通（ W_1-G-W_2 ）へ発展する。こうなると，商品から貨幣への転化は，裏をかえせば同時に，貨幣から商品への転化である。労働力商品を中心として貨幣がさいしょに資本へ転化した歴史的事象のあと，日常くりかえされる貨幣の資本への転化は，そのままの形状（ G ）でおこなわれる資本の貨幣への転化（機能転化，“げんじつの流過程”・ $G-W < \frac{A}{P_m}$ でみられるように）をともなう。商品が貨幣に転化しても，商品形態それじたいがこの世から消え去るものではない。貨幣と交換された個々の商品は消費されて流過程から消え去るとしても，あとからあとから同種類の新しい商品が再生産され・登場する。また貨幣が資本へ転化しても，おなじように貨幣はこの世から姿を消すのではない。商品と貨幣と資本とは，一連の歴史的発展段階を表示するものでありながらも，発展の最終段階でも共存し緊密に交流する。これらは，だから現段階の資本主義経済を支えている3本柱である。これらの3本柱のひとつを欠いても，商品経済・貨幣経済のうえにたつ資本経済は存立できない。

そこで注意しなければならないのは，とかく見おとされがちな，商品・貨幣・資本の本質・運動のそれぞれのありようと相互の関係である。くりかえし説いたように，本質のうえでも，運動のうえでも，商品が貨幣を，商品価格が貨幣

貨幣と資本（飯田）

量をリードするということは、交換・売買がおこなわれる“げんじつの流通過程”での事象であるいじょう、資本主義社会のなかでもそのまま通用する。この基本原則にもとづいて資本主義社会でのインフレ現象も解明されなければならない。いわゆる“貨幣数量説的インフレ論”を排除するためにも。また現代インフレは貨幣の問題ではなく、資本の問題だ、という基礎理論喪失観におちいらないためにも。現代資本主義の基礎構造を解明するには、「初めの困難」の克服から手をつけねばならない。

完（1980.8.30.稿）